里子・里親という家族

ファミリーホームで生きる子どもたち

吉田菜穂子 著
社会福祉士・保育士・介護福祉士

子を思う、親を思う、家族として暮らすことに
血のつながりが、
どれほどの意味がありますか？

私は里親である。

これまでに、
20人あまりの子どもたちと、
ともに暮らしてきた。
血縁のない子どもたちである。
どの子にも実の親が存在する。
子どもは、どんなに疎まれようとも、
どんなに嫌われようとも、
どんなに足げにされようとも、
実の親が大好きだ。
里親がどんなに心を尽くそうとも、
どんなに慈しもうとも、
どんなに愛を注ごうとも、
実の親にはかなわない。
それでも、私は、里親をやめない。

里親をやめることができない私がいる。（著者）

私はふつうの親・子と思っている皆さんへ

この"現実"に、存分に打ちのめされてください。

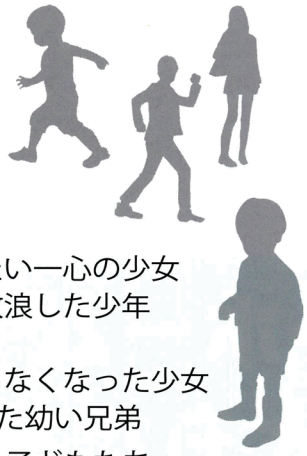
一人一人が悩み、
苦しみを抱えながら
懸命に生きようとする
子たちの生の声が、
それに応える
育ての親の
熱いまなざしが、
こころに突き刺さる。

販売
大空社出版
（発行　大空社）

子をもつ、もたないにかかわらず、人として

これ以上の“親”ごごろを、あなたは持てますか？

「子どもから入れるポストも作って欲しいなぁ」
「棄てられるほうが幸せ」



＊実母をつなぎ止めておきたい一心の少女
＊実父の厳しいしつけから放浪した少年
＊知的障がいを持つ少年
＊家庭復帰後に行方がわからなくなった少女
＊「パパ・ママ」と呼んでくれた幼い兄弟
……すべてかけがえのない子どもたち

いつの日か、あなたたちが新しい家族をもち、おだやかに、そして楽しく暮らしていることを、お父さんとお母さんはこころから祈っています。私たちはファミリーホームです。（本文より）

＊ファミリーホーム……「小規模住居型児童養育事業」（第２種社会福祉事業。児童福祉法第６条３第８項）の通称。要保護児童と呼ばれる血縁のない子どもたちを自治体から預かって養育する制度・組織で2009年に法定化された。

多人数の里子を養育する里親の著者夫婦は、福岡県の第１号として2010年にファミリーホームに移行し、“吉田ホーム”として血縁のない子どもたち（2012年８月現在６人）と生活している。

本書は著者が、子どもたちに出会い、里親となり、子どもたちを養育して実親のもとに返し、あるいは社会に巣立たせてきた経験を“里親日記”のように語った体験・実話集です。

１話１話が、子どもとその実（じつ）の親、また学校・施設や地域社会と格闘する“里親”の記録となっていて、読む者は、嘆息・同意・落胆・称賛・苦笑を禁じ得ず、しかし最後には希望と勇気を与えられる稀有な“人生の書”です。

（著者紹介）よしだ・なおこ　1958年生まれ。社会福祉士・保育士・介護福祉士。吉備国際大学大学院修士課程を経て、2011年　長崎純心大学大学院博士後期課程修了。〔著書〕里子事業の歴史的研究：福岡県里親会活動資料の分析（2011年、大空社）。現在、福岡県里親会副会長、福岡県宗像児童相談所地区里親会会長。1998年　里親登録、2009年　専門里親登録、2010年　小規模住居型児童養育事業（吉田ホーム）開設

里子・里親という家族
ファミリーホームで生きる子どもたち
吉田菜穂子 著（2012年11月刊）

A5判・並製199頁
ISBN978-4-283-00797-0
定価（本体1,400円＋税）

本文見本（縮小）

「赤ちゃんポスト」を知った子どもたち

平成19年５月10日、熊本県の慈恵病院で運用が始まった「こうのとりのゆりかご」は、「赤ちゃんポスト」として、日本中の世論を二分しました。

反対意見としては、捨て子を助長する、出自を知ることができないというもので、賛成意見は、命を守るということが中心であったように思います。

以下は、「赤ちゃんポストができる」というニュースを見た、児童養護施設に入所中で、ゴールデンウィークに季節里親として預かった小学校５年の明（あきら）と３年の登（のぼる）の兄弟、高校生の純子、小学４年の長女・舞衣（まい）の会話です。

あちこちに「赤ちゃんポスト」あったほうがいい。

登　「僕たちも、あれに入りたかったね、兄ちゃん。」
明　「そうやね、もっと早くあったら俺たちも入れたかもしれんし……。」
純子「どうして入りたいの？」
登　「だって、ポストに入ったら、叩かれずにすむやろ。」
明　「俺も入りたかったなぁ……そしたら、叩かれんけん、あぁ、早くあれば入りにいきたかった。」
登　「僕……きっと、入りに行っとったよ。」
純子「赤ちゃんポストがあったほうがいいと思う？」
明・登「絶対、あったほうがいい。」
舞衣「よく分からん。」
明　「叩くぐらいなら、棄てて欲しかったよ。園（児童養護施設）に行って嬉しかったもん。」
登　「でも、まいちゃんは、いいよねえ。」
舞衣「何でいいの？」
明　「だって、ここの家の子どもやから、ポストがなくても、いいやん？　お父さん叩かんし……。」
（中略）

こんな赤裸々で衝撃的な子どもの声が、たくさん詰まっています。

生死が迫り来る状況を体験した子ども

社会的養護下にある子どもの真実の声を、大人はなかなか聞く機会がないものです。子どもにとって、理屈はどうでもいいことで、生死が迫り来る状況を体験した子どもは、そこから抜け出すことだけが重要なのであって、赤ちゃんポストの是非を問うという社会の論理は、子どもには通用しないのだということを、大人は認識しなければならないと思います。（後略）

販売
大空社出版
（発行　大空社）
〒114-0032 東京都北区中十条4-3-2
TEL：03-5963-4451
FAX：03-5963-4461
E-mail: eigyo@ozorasha.co.jp

ご氏名
お届け先　〒
電話/FAX